

# 藤井懶齋年譜稿 (五)

— 元禄十一から宝永六年まで

勝又基\*

## 元禄十一年(一六九八) 戊寅 八十二歳

△この頃、増田立軒、懶齋を鳴滝に訪れる。

増田立軒『仲子語録』掲載。文章は元禄八年(一六九五)【居所(四)鳴滝隠棲】の項に引用した。懶齋が自ら鳴滝隠棲の理由を語っている。記事に訪問の年次は明記されていないが、柴田稿九十八頁はこれを元禄十一年頃のこととする。前後の記事との関係からの推定であろうと思われる、本稿もこれに従った。

### 【増田立軒】

阿波藩儒増田氏の祖・立軒については竹治貞夫『近世阿波漢学史の研究』(平成元年八月 風間書房)に詳しい。これによれば立軒は延宝元年(一六七三)に阿波藩医・増田策庵玄胡の次男として徳島に生まれた。

名は謙之、字は益夫、通称は初め文内、後に平内と改めた。立軒は号である。元禄四年(一六九一)、十九歳で京都に遊学し、当時伏見に在住した中村惕齋に勧められて儒学を学んだ。惕齋からは四十四歳の年下である。以後惕齋のもとで学び、元禄十五年(一七〇二)七月二十六日に惕齋が没して後は惕齋の学塾を相続する。

宝永五年(一七〇八)九月、三十三歳で阿波藩に呼び戻され、六代藩主綱矩および世子吉武の侍講を務めることとなった。寛保三年(一七四三)八月十四日没、七十一歳。

立軒は師・惕齋の晩年に未脱稿の著書の完成を託されている。そのこともあってか、惕齋の著書を校点刊行した『詩経示蒙句解』等や、『惕齋先生文集』『惕齋先生行状』『仲子語録』など師に関わる編著が多い。いきおい懶齋とのつながりも浅からぬものであったことが想像される。

### 【淡路の懶齋連】

阿波藩儒・増田立軒に触れた流れで、阿波藩の領地である淡路島における注目すべき動きを紹介したい。じつは近世中期の淡路には、藤井懶齋を奉ずる学者の一群があった。その中心人物の一人が仲野安雄である。仲野安雄は元禄七年(一六九四)、伊加利村の庄屋・孫左衛門の長男として生まれた。懶齋よりは八十年遅く生まれたことになる。安永七年(二七七八)没、八十五歳。淡路郷土史『淡路常磐草』の著者としてよく知られている。彼の伝は菊川兼男「仲野安雄と著述目録」(『三原文化』十八号 昭和三十六年二月 兵庫県立三原高等学校文化部)、同「享保・宝暦期の淡路の学者とその思想」(『兵庫史学』二十九・三十合併号 昭和三十七年七月 兵庫史学会)、同「三原文化」第四章第四節「享保・宝暦期の文化」(昭和五十四年三月 三原郡町村会事務所)に詳しい。現在その資料は淡路歴史文化史料館(兵庫県洲本市)に一括して

管理されており、『淡路文化史料館収蔵史料目録 第十二集 仲野安雄家／立木兼善／関係文書』（平成七年十二月 洲本市立淡路文化史料館）が備わる。

安雄は安永期まで生きたため、主に近世中〜後期の視点から把握されてきた。たとえば菊川稿は安雄の国学者としての側面、古文辞学者としての側面を強調している。しかし本稿にとって安雄が興味深いのは、藤井懶齋著書の注釈を行っている点である。仲野安雄文庫には『孝子伝萱葉抄』（自筆写本三冊）、『諫諍録栢葉抄』（自筆写本二冊）、『睡余録附纂』（自筆写本二冊）が残されている。それぞれ懶齋の漢文著書『本朝孝子伝』『国朝諫諍録』『睡余録』の注釈書である。これらの成立年次は明記されていないが、およそ延享元年前後の成立と考えている。『諫諍録栢葉抄』の草稿本たる『諫諍録 解』（請求記号16/12）裏見返には「〔扇形印）延享元年十月妻木翁為諸生講述諫諍録、至二年六月終講。其講本有標注。今乞仮其本、以補愚抄之遺漏」と、延享元年（一七四四）に妻木翁がおこなった『国朝諫諍録』についての講義をもとに注を補ったことが記されている。これが成立年次測定のひとつの基準となる。

『国朝諫諍録』の講義を行っていたという「妻木翁」とは、阿波藩士・妻木氏のことである。妻木氏の家系は未詳であるが、宮本武史編『徳島藩士譜』（昭和四十七年十月 同刊行会）によれば、その一人貞彦は洲本諸奉行および洲本御船預り奉行を務めた人物である。寛延年間から宝暦四年の分限帳にその名が記されており、百石二人扶持であったという。

彼らが行った議論の記録に『清議会稿』がある。これは妻木貞彦が策問し、妻木恒道、中野安雄ら十数名が答えるという知的鍛錬である。これは延享二年（一七四五）九月から宝暦二年（一七五二）十二月までの

約七年間行われた。

この論題にも、藤井懶齋の『本朝孝子伝』や『睡余録』の文がしばしば用いられている。たとえば延享二年（一七四五）十月二十五日の会では、妻木貞彦の出題で、『本朝孝子伝』が本問資忠を孝子の一人に採っていることは是非を問うている。また該書の別箇所にも、

敬ふ所の故人、懶齋子等を以て尊と為す。

（延享三年（一七四六）正月九日、上田春清）

嘗て懶齋先生と云ふ者有り。識高く、学博く、行厚く、論明かなり。実に才徳兼備の君子と謂ふべし。老後書を著し、『睡余録』と号す。学者尤も読まざるべからざるの書なり。

（同年正月二十五日、妻木貞彦）

などと、懶齋の学問を仰ぐべきものとして扱っている言辭が見える。これほど懶齋に心酔している一群を、筆者は他のどの地域、どの時代においても知らない。

では、このような懶齋連とも言うべき一群はどのようにして発生したのであろうか。『兵庫県史』第三編近世（Ⅱ）（昭和五十五年三月 兵庫県）第七章「学問・文化の隆替」は妻木繁彦について「儒学は洲本の美馬聖兵衛義方に手ほどきを受け、さらに京都に遊学して山崎闇齋の門下藤井懶齋に学びこれに傾倒した」と記している。ただし今のところ懶齋に学んだというこの記述の根拠を追跡できていない。

現段階で指摘できるのは、淡路が属した阿波藩の学問傾向である。阿波藩には増田立軒がいた。元禄十一年（一六九八）【増田立軒】の項に述べた通り、阿波藩儒・増田立軒は懶齋の朋友・中村惕齋に従い、学んでいた。そして先に見た『清議会稿』には、米本立的、多田正弼ら、増田立軒の門人も参加している。淡路島の懶齋びいきは、中村惕齋を奉ず

る阿波藩学の一支流としてひとまず理解することが可能であろう。

### ○三月、大和国の孝女伊麻の伝記『今市物語』を著す。

#### 【今市物語】

伊麻は大和国今市村（現奈良県葛城市）の孝女である。伊麻については『当麻町史続編』（昭和五十一年四月 当麻町教育委員会）が諸文献を集めて適切にまとめている。

伊麻と弟の長兵衛は、父・長右衛門によく仕えていた。寛文十一年（一六七一）夏、流行の疫痢で父が危篤となり、医者は鰻を煮て食べれば病が癒えると診断した。その夜、家の水瓶から音がするので見てみると、大きな鰻が中にいたのでこれを食べさせ、父の病は癒えた。遠近の人は孝の徳が天に通じたのだと二人を賞し、郡山侯（本多内記政勝）はこれを褒めて錢穀を伊麻に与えた、という逸話がよく知られている。そのち貞享五年（一六八八）四月十二日には松尾芭蕉が訪れた。そのことを京都で芭蕉から聞いた友人の雲竹は、画工友竹とともに伊麻を訪れて画賛を描いている。伊麻は元禄十七年（一七〇四）二月二十七日に八十一歳にて没している。

さてこの伊麻について記した伝記でよく知られているものに、『今市物語』がある。すでに岡本勝「石水博物館蔵『今市物語』（翻刻と解題）」（愛知教育大学国語国文学報）六十（平成十四年三月 愛知教育大学国語国文学研究室）や中田武編『田中大秀 第五冊「随筆・冊子」』（二〇〇〇）（平成十七年二月 勉誠社）に翻字されている。

該書の末尾には「かくいふは元禄十一年の春の末つかたなり。いまはことし七十五、長は七十一なり」とあるので、伊麻の生前に書かれた作

品だということが分かる。ただし著者については書物を見る限り明記されておらず、従来明らかになっていなかった。

該書が懶斎の著書だと分かったのは、三輪執斎の発言に気づいたからである。『執斎雜著』（『日本倫理彙編』卷之二（明治三十四年八月 育成会）所載）卷之二「孝子於以麻碑」に次のような記載がある。

元禄十一年藤井懶斎翁其事を記せり。其時いま七十五長七十一にて恙なし。今年辛亥に皆烏有となる。郷人其家に碑せむとして、遠く言を予以徴す。よりにて藤井子の伝をつみて、其概をのぶといふ。

実際に懶斎とも面会している三輪執斎の言であることを考えると、信憑性は高いと言うべきだろう。こうして新たな懶斎作の孝子伝が判明して、改めて天和と元禄期の孝子伝に懶斎が果たした役割の大きさに思い知らされる。池田光政や松平忠房など、地方で閉じた動きはあったものの、全国を見渡して孝子説話や孝子伝を探り、自らも伝記を記す、という営為は、この時期には懶斎の独壇場であったと言っても過言ではないのである。

### 元禄十二年（一六九九）己卯 八十三歳

#### ○元旦、歳旦歌あり。

関田駒吉「藤井懶斎の没年」（元和三年（一六一七）【生没年】の項参照）によれば、森繁夫所蔵の小点もの自筆として、「八十二にいたりける春のはじめに／こゝのそちこちかの浦路のすて小船朽せで年をこゆるつれなさ」とあるという。

元禄十三年（一七〇〇）庚辰 八十四歳

○この年、多久聖廟の孔夫子像成る。中村愴斎と懶斎が共同で設計する。

『重要文化財多久聖廟』第三版（昭和五十八年三月 多久市教育委員会）に載る。

多久聖廟は肥前国小城郡多久邑（現佐賀県多久市）に存する聖廟である。のちに佐賀藩家老となった多久茂文によって起案され、元禄五年（一六九二）から着工、およそ十六年の歳月を経て宝永五年（一七〇八）に落成を見た。この間聖像は元禄十三（一七〇〇）年に京都において鑄造され、翌年東原庵内に仮小屋を設立して祭られたという。

『重要文化財多久聖廟』口絵には孔夫子像の写真が掲載されている。

このキャプションによれば「元禄十三年製作・高さ二尺七寸／中村愴斎作／唐金製・銘は南効中欽監工とある」という。この製作に藤井懶斎が関わっていたことは、武富英亮「鶴山書院遷座記」に次の通り記されている（原漢文）。

欽や深く聖学の蘊を極め、制度文為の学を以て一家を為す。当時洛の藤臧老儒と雁行を為す。仲欽甚だ藤公の志願を喜び、藤臧と相謀り、古今の聖蹟を考へ、……

「欽」「仲欽」は中村愴斎。「藤臧老儒」は藤井懶斎。「藤公」は多久茂文。つまり中村愴斎が多久茂文から聖像製作の依頼を受けた際、愴斎は懶斎と謀って考証を行い、像を設計したというのである。

元禄十五年（一七〇二）壬午 八十六歳

○元旦、歳旦歌あり。

宮川忍斎『槎行記』に、「又其よはひは八十餘り六のことぶきを受たりしゆへに、此春筆を試る哥に、／八十あまりむつかのよどの古柳なをこの春もくちや残らん／とよみ侍りぬ」とある。また『石原家記』巻上「延宝六戊午年」の項にも「八十六歳歳旦」として同じ歌が掲載されている。

□三月、都の錦『元禄大平記』刊。「京都儒者親四天王」に数えられる。

『元禄大平記』（京都升屋為兵衛刊）は文壇評的な側面のある浮世草子である。その巻七の四「今の学者を指折てみる」に懶斎の名が出る。「京都儒者親四天王」として、一人武者の北村伊兵衛に続いて、伊藤源助（仁斎）・中村七左衛門（愴斎）・浅見十次郎（綱斎）と並んで挙げられているのである。「藤井玄著 六十三歳号懶斎」と題されたそれは、「三番に藤井蘭斎これ又隠儒にして道をたのしむ。老荘の学問においては此人につゞくものなし。陸象山と首引きしてもまけぬほどの男」と評されている（本文は中嶋隆編『都の錦集』（叢書江戸文庫 国書刊行会）に拠った）。

【金蘭斎との混同】

右の記述で目を引くのは、懶斎を老荘の学問の第一人者と評していることである。



述べてきた通り、藤井懶齋は医を岡本玄治に学び、久留米藩に儒医として仕えた。儒学では山崎闇齋と意見を交わし、中村楊齋らと交わった朱子学者である。老荘の学に親しんだ形跡は見ることができない。それほどばかりか著書中には次のような老荘批判の言辞も見て取る事ができる。

夢多くは是れ妄、故に真人は之無し。惟愚者妄を認て真と為す。

故に曰く「癡人の前へ夢説くべからず」と。武州人の夢の如き真妄如何。曰く「真人夢無し。是れ乃ち莊周が説話にして聖經の言ふ所に非ず（下略）」

（『本朝孝子伝』土庶部十九「武州孝子」）

此段又莊周がよだれをねぶれり。（『徒然草摘義』）

つまり藤井懶齋が老荘の第一人者だという評は全くの見当違いである。では都の錦はどうして誤ったのか。結論から言えば、この一文は藤井懶齋と同時代の老荘学者・金蘭齋とを混同している。

金蘭齋は、当時としては珍しい老荘学者であった。その伝については、伴蒿溪『近世畸人伝』に載る他、近代では安藤和風「金蘭齋」（『俳諧研究』〈明治四十一年五月 春陽堂〉）、中村幸彦「老荘の実践者 金蘭齋」（『中村幸彦著述集』所収）等に論考があり、今ここで新たに付け加えるべき資料を持たない。諸先学の業績に依り、金蘭齋伝の要点をかいつまんでおこう。

金蘭齋は童名江長、後、三允と改める。諱徳隣、字忠祐。号蘭齋、洛山逸民、臥雲叟等。秋田藩医小鴨三室の子。十七歳にして上京し、西山李斎、伊藤仁斎に学んだ。夙に通世の志があり、岡崎村、神楽岡に隠れ住んだ。延宝九年より五年間秋田藩に仕官した後、上京三年再び京都に戻ると当たって、姓を父の本姓である金氏に戻し、享保十六年に京都で没した。

金蘭齋の伝記として現在知られている最もまとまったものは、平元梅

隣が記した「退隱草序」である。「退隱草」は現存を知らないが、この序文のみ、安藤和風の筆写によると思われるものが秋田県立図書館に所蔵されている（「退隱草序 梅隣先生事状」AH919/155）。ここで注目すべきは次の部分である。

延宝九年、牧野善左衛門到自本庄誘掖先生帰秋田。先生年二十八。

臨発先生有詩云「終焉必取洛山」。明年三忠病死。先生改名玄固業留。五年而上京與仲弼同居洛東岩下先生学舎。

すなわち、都の錦が『元禄太平記』を執筆した元禄末年前後には、藤井懶齋も金蘭齋も共に京都に住していた事になるのである。そして、「ランスイ」という名前の一致が何より混同の要因であっただろう。所見の範囲では、藤井懶齋が自称として「蘭齋」の用字を用いたものはないが、他人が「蘭齋」と表記する同時代の事例は、「国朝諫諍録 藤井蘭齋述」（元禄五年刊書籍目録）、「藤蘭齋ハ有馬殿の扶持人也、今ハ京師北山ニアリ」（中村雅記）など、いくつかを見出すことができた。このように、藤井懶齋と金蘭齋は、同時代・同地域に共に儒者を業としていたのみならず、同音の号を用いていた事により、『元禄大平記』の記事のような両者を混同した記事が生まれたのである。

さらに言えば、藤井懶齋・金蘭齋の両者は共に隠逸者として名高かった。鍋島直條『楓園家塵』巻百八十「塵袋」上巻には、「京洛之隠逸」として白幽、蘭齋、兵九郎の三名を挙げる。隠者としての側面が両者の素性を分かりにくくし、混同を助長したのではなかっただろうか。

□七月二十六日、中村楊齋没、七十四歳。

遺体は同二十九日未明、洛北一乗寺村円光寺の三町ほど北に埋葬され

る。『仲子語録』によれば、懶齋は葬礼に参列していない。(柴田稿)

○八月、「多久邑字説」を著す。

末尾に「元禄壬午壮月穀日／雒敬西人藤季廉宗筆于伊蕎軒下年八十  
六」とある。『重要文化財多久聖廟』第三版(昭和五十八年三月 多久  
市教育委員会)に載る。

多久聖廟については元禄十三年(一七〇〇)の項参照。聖廟の建設を  
発案した多久邑主・多久茂文に請われて書いたものであることが文中に  
明記されている。

○九月、『扶桑千家詩』刊。懶齋詩「春雪」が収められ  
る。

該書は筑前の儒者・古野鏡山の編。江戸時代前期の儒者・詩人による  
漢詩を集めた叢集である。刊記「元禄十五壬午載九月吉祥日／平安城書  
肆 上原半兵衛梓」。二巻から成り、上巻には七言絶句百七十九首、下  
巻には七言律詩九十一首を、それぞれ四季の順に集めている。その巻上  
に次の詩が収められている(原漢文)。

春雪 藤井懶齋京師

春來飛雪更に多きことを加ふ 瘦竹病梅汝を如何せん  
山亦た余が白髪に同きに似て 峰頭歳を躪て転幡々

○十月二十五日、千本の自宅に福岡藩の御伽衆宮川忍齋  
を迎える。

久保田啓一「福岡藩臨時御伽衆宮川忍齋」(『雅俗』第二号(平成七年  
一月 雅俗の会))の紹介に基づく。宮川忍齋は正保四年(一六四七)  
生、享保元年(一七一六)没、七十歳。写本で広く流布した『関ヶ原軍  
記大成』の著者として知られる人物である。元禄十五年(一七〇二)年  
十月、忍齋は福岡藩四代藩主・黒田綱政の扈從として京都まで付き従っ  
た。その際の紀行『槎行記』に懶齋を訪問した記事が見える。「千本の  
ほとり」を訪れた忍齋を出迎えたのは懶齋とその次男・象水である。以  
下、その問答部分を引用してみる(底本は九州大学音無文庫本)。

時うつりて後あるじのいはく、「今年の春身まかり給ひし筑前の  
国老重種は誰人の道を聞給ひしにや」と有けるにより、「土岐重元  
のつたへなり」と答へ侍りしに、「止翁の学術おほやうたしく聞  
へにたり。此故に国老の学びにつるえなかりしにや。其なくなり給  
はんとする頃、桜の花を見て、

花も花見る人もひとの世中にうごかぬ山のやまさくらかな  
とよめる歌もいみ有てきこえ侍る」  
など語聞えしつるでに予がいはく、

「今又わが国に致仕の宰臣立花増弘と号する有り。下官邦君に随  
ひて旅だつ時、その老人のいへらく、『われ若かりし時より久しく  
君につかへて江戸長崎の旅行にいく度か随ひ侍りしが、旅に出ては  
君臣なれ近付て、うやまひ頓てゆるみやすくおぼへし。いふにはた  
らず事ながら、其心せよかし』といへり。常に持敬チケイの工夫有て心に  
ぬしある人はいかにもあれ、我つらの放心のみなるつたなき身には、

いみじき御いましめならずや」

と語り侍りしに、あるじ其宰臣の姓名を問ひかへして、

「われつくしに住たりし時より令名を聞し人なり。事上の敬を思

はれたる心づかひ、いと奥ゆかし。さればひたすら敬に居て心にぬ

しある人をその随ひがほなるに付て思ひ出ぬ。昨ふ人の入来て、

『はからずも二百五十戒をたもつ僧にあひしが、いはゆる他道の趣

したるに似て、そしきも忍びかたし』といひしに、とりあへず絶句

をつくりたり」

とて、語りいでたりし三四の句、

何知二百十余戒 唯在聖門一敬中 懶齋

これかれ物語する内に、予が師として僅に道を聞習ひし長沼澹齋

伏見に有し比、折ふしに語りあひし事などいひ出て、其身まかりし

をあるじのふかくおしめるも、いとかなし。

それより年比の物語いとはてしなきつるでに、又予がいはく、

「此度君に随ひたる人々の中に福富大休軒と号するあり。その子

に又百と名付たるは、今年はつかに十一なれど、四五のふみとくよ

みおはり、そのざえ常の子にかはりたるを、父の大休、憐の余りに

いざなひのぼりしか、伊藤維楨にたいめを乞ひ、同じくは貴翁にも

まみへさせて国に帰らまほしといひつれど、いなみ玉はん事をしり

て、うかひかざりし」

と語り侍るに、翁のいはく、

「少年の時よりざえあるは、おひさきこもりて心にくし。されど

つたなき老が身はいふもたらず。たとひ名になるはかせにもせよ、

しばしが程のためさせて我が子のほまれとなさんよりはしかじ。

貝原老儒にあつらへつげて、たゞしきまなびをわづかにも聞得させ

てんこそ、いか斗親のめぐみならめ」

とて、すべて學術にえらびある事を語りこえしが、みじかき冬の日

もたけて、餉をもていでしかば、あるじと共にくひて盃をとりかは

し、いとまこひてまかりなるとする折しも、から歌、大和歌を思ひ

つゞけて、

芳声満耳已多時 情意只憑鴻雁馳

忽見德輝又何幸 令人喜色溢双眉

船出せし八重の塩路の旅ごろも

きてしもうれし九重の空

春にまた来てこそとはめ色も香も

ふかき千もとの花の木陰を

といひ出たりしに、あるじ筆を染て、

多季相憶一逢時 詩趣文論豈背馳

未至哀齡才最老 為君我甚憶龐眉

たちよるはうれしかりしをたびごろも

きてとくかえるうらみやはなき

千本さく春にあらねど老らくの

花よりもろき身をいかにせむ

と書ひ付しも例のいちはやきみやびなるべし。(下略)

福岡藩家老を務めた立花重種、忍齋の師である長沼澹齋を上げて、

その人となりや學問について論じている。その論は要するに文中でも言

う通り「學術にえらびある事」、すなわち適切な學問と師を選ぶべきだ

ということである。それは居敬を中心とした學びであり、より具体的に

言えば土岐重元、長沼澹齋、貝原益軒のような人々に學べ、ということ

であった。

## 元禄十六年（一七〇三） 癸未 八十七歳

□正月二十日、室鳩巢より稻生若水へ手紙。約一ヶ月前に起きた赤穂浪士討入りに触れ、懶斎の評価を想像する。

近藤磐雄『加賀松雲公』中巻挿箋二十九に写真とともに紹介されている南郷貴族院議員所蔵の稻生若水あて室鳩巢書翰。当時鳩巢は金沢に、若水は京都にいた。この中に次のような文面がある（『加賀松雲公』翻字による）。

江戸旧臘十四日、浅野氏旧臣共、君仇吉良上野介殿を討取申儀、前代未聞、忠義之氣凛々。名教之助益と奉存候。赤穂士風の厚も是にて相知れ、偏に内匠頭殿養育人材之巧も著れ申候。当地なども此儀のみ沙汰仕候。其御地輿論いかゞ候哉。長民、象水等の豪士、いかゞ評し被申候哉と奉存候。四十八人之内、兼而御存知之者も有之候哉。誠以田横五百人の英氣と奉存候。伊蒿老人さぞ大慶之体推察、見申様に奉存候。

鳩巢は浪士の行動を讃えた上で、この事件に対する京都における輿論と、懶斎の次男・象水（元禄元年（一六八八）五月、【家族（四）】次男・象水】の項参照）の反応について尋ねている。そして伊蒿老人すなわち懶斎はさぞ喜んでいるだろうと推察している。元禄三年（一六九〇）五月の項で見た通り、稻生若水は懶斎に『いなご草』の序文を請うた人物。加賀藩とのつながりも深く、鳩巢が懶斎の反応を質すのに格好の人物であった。

△この年、『読書余吟』を著すか。

### 【『読書余吟』】

懶斎の道歌活動は、見てきた『蔵笥百首』『竹馬歌』に加えて、『読書余吟』がある。所見本である岩瀬文庫本は、室鳩巢『大学詠歌』と合冊された写本で、内題下に「季廉」と署名がある。

該書は五常、小学、大学、論語、孟子、中庸、近思録、易、詩経、書経、春秋、礼記の内容を百一首の和歌にしたものである。たとえば五常のうち「仁」と題された和歌は、

草も木もうるほふ春の雨なれや恵あまねき人のこゝろは  
というものである。初学者にも分かりやすいよう儒学の本質を説こうとした書物である。

岩瀬文庫本に成立年次は明記されていない。ただし立石好人「筑後の歌人（一）」（『筑後』第五号（昭和八年四月））に、元禄十五年の歳旦歌を挙げたあと、「翌年には五常の和歌とて」として、仁義礼智信の和歌五首を挙げている。当面これに従って元禄十六年（一七〇三）の成立と考えておく。

なお没後百二十九年を経た天保九年（一八三八）十二月に大坂加賀谷善蔵他二肆より『初学伊呂波歌教鑑』が刊行される。該書は見返に「藤井懶斎先生著」と明記し、青蓼館主人による序にも、「藤井懶斎先生が婆心こゝに謁されしは、竹馬歌、蔵笥百首など、其余著述ありし数書に明なり。今此以呂波歌も即其一つにして、仁義礼智信の道を論し、身を修め、家を斉ふの至要を示すや専ら簡約にして（下略）」と、懶斎作であることを謳っている。しかし『江戸時代女性文庫』三（平成六年五月 大空社）解題（小泉吉永執筆）が指摘する通りこれは仮託であり、

実際には懶斎の作ではない。

【四書解説】

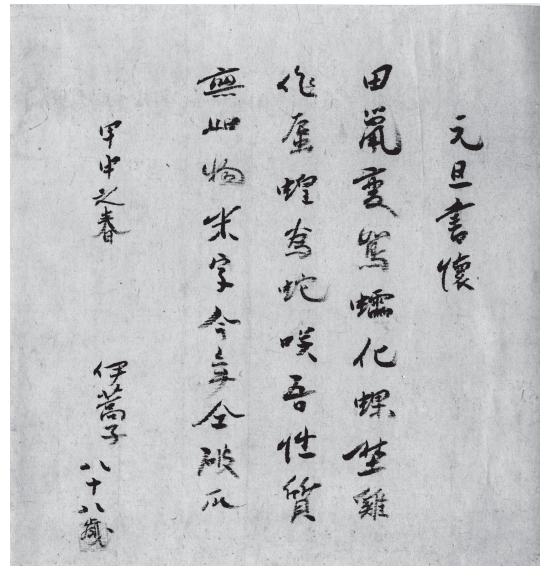
併せて懶斎の著書として指摘されながら現存が確かめられない書物に ついても言及しておく。関儀一郎『近世漢文学者<sup>傳記</sup>大事典』(昭和十八年)に著述の一として『四書解説』を挙げる。題名からして懶斎の著作にふさわしいように思うが、最終的な判断には現物の出現を待つしかない。

○五月、中村惕斎著『孝経示蒙句解』に序す。

該書は中村惕斎編の漢籍国字解。所見本都立中央図書館諸橋文庫本(123/MW/242)は刊記「華洛二條/書肆武村新兵衛刊行」。懶斎序は「孝経示蒙句解序」として、「元禄癸未五月穀日/伊蒿子膝臧季廉序」。これによれば小原大丈軒(季忠)が出版を企図し、彼から序の執筆を求められたという。

○六月中旬、『惕斎先生行状』に跋を寄す。

該書は仲村惕斎の没後に編まれ、延享三年(一七四六)に刊行されたもの。所見本内閣文庫本は刊記「延享丙寅秋九月/書林/阿州徳島/神子田所平/大阪淡路町心齋橋筋角/安井嘉兵衛/板行」。大本一巻一冊。冒頭に惕斎が自らの像に施した賛の自筆を左版で刻し、惕斎七十余歳時の肖像画も掲載する。増田立件による行状(「元禄十五年歳次壬午冬十月日/門人阿陽増謙益夫謹状」)のあと、懶斎跋「書仲敬甫行状之後」がある。末尾には「元禄癸未季夏中澣伊蒿子膝臧」とある。このあとと市



邨元感、藤成子修、河村誠之、伴正貞、露木篤慎伯の跋が続く。

宝永元年(一七〇四) 甲申 八十八歳

○初春、歳旦詩を詠む。

架蔵色紙に懶斎八十八歳の歳旦詩「元旦所懷」あり(左図参照)。「甲申之春 伊蒿子 八十八歳[印]」とある。印記は不鮮明で判読しがた い。

この色紙が貴重なのは懶斎の筆跡が分かるところである。元禄三年【居所(三)千本】の項に挙げた書翰と並び、現時点では数少ない自筆



と目される資料である。

## 宝永二年（一七〇五） 乙酉 八十九歳

○十一月中旬、自身の旧作『再往日記』に跋する。

正保二年（一六四五）『再往日記』参照。跋文に「宝永乙酉（引用者注：宝永二（一七〇五）年）仲冬中澣伊蒿子年八十九」とある。

○この年、「真鍋氏説」を記す。

『竹原志料』所載。漢文。末尾に「洛陽老儒生藤原姓真邊氏伊蒿子臧季廉染筆於懶齋下時年八十九」とある。歴史上の真鍋氏を列挙したもの。

### 【真鍋弥介（祐重）との関係】

久留米藩に仕えた時期、懶齋は真鍋仲庵と名乗った。懶齋と真鍋氏との具体的なつながりを示唆するものに、随筆『睡余録』（宝永三年（一七〇六）の項参照）の記事がある。これによれば、真鍋（真邊とも）弥介は諱・祐重。讃岐国香西郡の人で、郡主・香西伊賀守好清の家族である。十六歳の時、暴虐の家宰・香西大隅を斬って名を国中に知られた。

天正九年（一五八一）二月、土州の長曾我部元親との闘いでは三士を斬った。また同年七月には、夜に独りで敵壘に迫って神取彦兵衛を撃ち取り、香西好清から賞された。同十年（一五八二）八月に香西の城が土州から攻められた際には城中に攻め入った武将たちを追い払い、その功で再び好清から賞された。豊臣が興って香西が減び、讃州が生駒氏に与えられると、これに従って朝鮮出兵に赴き、多くの功を挙げた。そのある

一日、弥介が崖下にいると、たまたま通りかかった芸島の福島正則が知らずに崖上から唾を吐いた。祐重は怒って崖に登り、正則に謝罪させたという。

この章段の末尾には「余、幸ひに族人の後に従へるを以て、家録を閲、老者に問ひ、其の梗概を聞くことを得たる者、右の如し。仍て此に筆して異日史氏の採るに系ぐ」（原漢文）とある。懶齋と戦国武将・真鍋祐重とのつながりを明記した文章である。ただしこの資料でも、その血縁が具体的にどのようなものであったかは明らかでない。

この問題を明らかにするためには、『讃州府真行寺先住世系 附外戚系図』（前出）が参考になる。このうち外戚系図に相当する箇所には「真鍋又左衛門藤原某」を筆頭とする系図が付されている。ここには又左衛門の子として「祐重」、その祐重に一女二男があり、その一女に「女子八世了休室」とある。また同系図の「讃州府真行寺先住世系」に相当する箇所によれば、八世了休は懶齋の祖父にあたる。つまり真鍋祐重の娘が懶齋の祖母なのであり、真鍋祐重は藤井懶齋から見れば曾祖父にあたるのである。

## 宝永三年（一七〇六） 丙戌 九十歳

○一月、懶齋著『睡余録』この頃までに成る。

### 【『睡余録』】

該書は藤井懶齋の写本漢文随筆。内容は主に読書や身の回りの出来事から学問的な問題につなげて考察を行うものが多い。

諸本により巻数・話数が異なるようであるが未考。ただし狩野文庫本

に付された立軒の序文には次のようにある。この記事からこの頃までには成立していたということが判る。

先生姓藤井名蔵号懶齋。隠居于洛之西巷。予与先生相去遠矣。而幸私淑於人而得視此書。不堪歎躍、自忘卑陋、謾述所思以序於卷端云爾。

宝永丙戌孟春 盡日阿陽庸醫増田玄鄰謹識  
該書は懶齋没後の正徳五年（一七一五）五月、抄出本が『閑際筆記』と題して大坂柏原屋清右衛門、同与市、同敦賀屋九兵衛より刊行された。内題下に「門人稲葉氏校訂」と署名するのは閑齋学者・稲葉迂齋か。また該書は半年後に大幅な修訂が行われたが、この詳細に関しては市古夏生『閑際筆記』をめぐって——出版規制の問題』（平成二年三月初出。『近世初期文学と出版文化』〈平成十年六月 若草書房〉所収）に詳しい。天明三年（一七八三）には『和漢太平広記』と改題されている。

#### 【懶齋の仏教批判】

懶齋の仏教批判の姿勢は『本朝孝子伝』『徒然草摘義』など、多くの著書において窺う事ができる。また辻善之助『日本仏教史』近世編（岩波書店）にも採り上げられ、よく知られるところである。

しかし『睡余録』の一章では、そうした彼の言説と実生活との齟齬についてただした問答がある。懶齋はある人から「翁、浮屠と交を絶たず、反て相愛する者有るは何ぞや」、すなわち、あれだけ僧を嫌っていたながら、なぜ交流があるのか、と質問を受けた。これに対して懶齋は、次の三つを挙げて回答している。（一）今の世では十人中八九人が仏教を宗旨としている。これを完全に拒んだら、ほとんど人事を廃さねばならなくなる。（二）韓文公・欧陽公・朱子といった、中国で仏教に敵しかつた儒学者たちも、仏者との交流はある。（三）毘尼（律）や禪定は儒教

と通じる所があり、方向は異なるとしても益無しとしない。

たしかに懶齋には僧との交流があった。久留米藩儒時代に高良山主・寂源と共に高良山十景を選んだことは寛文九年（一六六九）【寂源との交流】に示した。また『睡余録』に徴すれば、「僧魯合は余が方外の交なり」（第一七二話）、「天圭和尚余に謂て曰く」（第二八九話）と、僧との交流が交流を見せている。さらに元禄八年（一六九五）【居所（四）】鳴滝隠棲の項に記した通り、晩年には寺院の空庵に住んでいる。近世前期における儒者のあり方として、僧との交わりを完全に絶つことは、現実問題として難しかっただろう。

#### 宝永四年（一七〇七）丁亥 九十一歳

○このころ、はじめて室鳩巢と面会するか。また鳩巢から『赤城義人録』を送られる。

『鳩巢文集』巻十一「与稲宣義書」。年次は「去年冬、婢生男乳育無他」とあるところから推定した。鳩巢の男児は七十郎といい、宝永三（一七〇六）年十一月二十三日生（『日本の思想家 室鳩巢』所載年譜に拠る）という。また文中に「僕年五十」ともある。万治元年（一六五八）生の鳩巢五十歳は宝永四年であるので、年次が一致する。

この書簡は「前日藤井徴君に面諭す」（原漢文）とあるので、懶齋と鳩巢とが実際に面会したことが分かる。鳩巢が元禄十年（一六九七）ごろから噂や書物でのみ知る懶齋に興味を持っていたことは、【鳩巢・木齋往復書簡】の項で述べた。そのうち実際に面識を得た事を示す資料では、これが現時点で知る限り最も早いものである。

この書翰には赤穂事件についても言及がある。先に見た元禄十六年正月二十九日付書簡では、鳩巢は赤穂浪士討ち入りについて懶齋がどのような評価を下しているのかに興味を持っていた。本書翰では「徵君深く赤穂義士の事を感じ」と、懶齋が義士を評価していたことが記されている。また懶齋が鳩巢の『赤城義人録』を読みたがったために、写本を進呈したという事実も記されている。

△このころ、林鳳岡と書簡のやりとりを始める。

『鳳岡林先生全集』巻六十四（十四丁ウ〜十五丁オ）に「寄藤井懶齋并序」あり。

寄藤井懶齋并序

藤井懶齋、久しく洛陽に住む。単に儒林を思ひ、経を講じ、理を説く。頃年閑居し、頤養謝務す。今茲に九十一歳。精神猶ほ未だ衰耗せざるがごとし、馮唐の齡、以て祝ふべし。伏生之寿、以て期すべし。曾て其の志を聞き、未だ其の面を覩ず。或人一語を寄せんことを請ふ。是に於て一絶を贅す。

身老心閑避世塵 有余不足任天真 白頭晚喜太玄易 羞見成都  
売卜人

この文章から得られる尤も重要な情報は、懶齋がこの時期まで林鳳岡と交流が無かったことが分かる点であろう。『本朝孝子伝』『今世』部で懶齋は、林鷲峰など林家の儒者が書いた孝子伝をそのまま引用しているが、実際に面識があった訳ではないのである。

宝永五年（一七〇八）戊子 九十二歳

△このころ、林鳳岡と書簡のやりとりを行う。

『鳳岡林先生全集』巻六十五（一丁ウ〜二丁オ）に「寄藤井懶齋并序」あり。内容から、前年懶齋へ贈った詩に対する、返礼の返礼であると分かる。

宝永六年（一七〇九）己丑 九十三歳

○七月十四日、懶齋没、九十三歳。鳴滝西寿寺に葬られる。

元和三年（一六一七）【生没年】の項参照。

【藤井懶齋の果たした役割】

九十三歳と長きに及んだ懶齋の一生とその文事とを顧みて来た。彼は近世文芸にどのような役割を果たしただろうか。筆者は三つのことから挙げるができるかと思う。

まず第一点は、京都の朱子学者としての独特な地位を築いたことである。中村惕齋らと共に京都市中で儒書講釈を行いながら、伊藤仁齋らとは相反する、居敬を学の中心に据えた朱子学者として、確固たる地位を確立した。彼らの一群は現在あまり評価されていないが、加賀藩や阿波藩、福岡藩などに同調者を生むなど、その評価は当時において決して低いものではなかった。

二つめは、孝子伝の世界における先駆者的存在だったことである。

『本朝孝子伝』までは、孝子の表彰はなされても、それについて伝記を書くということはほとんどなされなかった。そうした中『本朝孝子伝』は当代の孝子を積極的に文章化（すなわち孝子伝化）していった。『本朝孝子伝』の流行は、その後の孝子伝執筆の風潮を作り上げたと言っている。また西鶴『本朝二十不孝』に影響を与えたほか、その後の日本の代表的孝子の人選にも大きく影響を与えたのである。

三つめは、儒者として仮名教訓書の出版に積極的であったことである。その多くは匿名であったが、儒者でありながら『蔵笥百首』『仮名本朝孝子伝』『和漢為善録』など、多くの平仮名教訓書を積極的に刊行した人物は、この時期そう多くはない。その意味で江戸時代前期の仮名教訓書界においては貝原益軒とならび、さらに一味違う面を持った存在であると言っている。後代には関係ない仮名教訓書までもが懶斎作と仮託されるに至った。

要するに彼は、延宝〜宝永という時期の文学が持つ教訓的な側面を体現した人物であったと言えるだろう。彼の存在が、従来の近世前期文学の総体を考える上で何らかの手がかりとなれば幸いである。

前号までの補足

◆正保二年（一六四五）の「○八月九日、京を発ち二度目の江戸行。二十四日の到着までを和文紀行『再往日記』に記す」條の左に

【『再往日記』】

の小見出しを追加。

◆元禄十年（一六九七）の項に追加

○このころ、三輪執斎の訪問を受ける。

三輪執斎『格物弁疑』自序（元禄十年（一六九七）十一月）に次のような記載がある。本文は高瀬武次郎編『三輪執斎』（大正十三年十月 三輪繁蔵）によった。

……独り西山の隠士藤井懶斎先生、行年八旬余にして、此道（引用者注：格物）を懐にして出さず。居敬を以て自修め玉ひぬるを求めて、往て教示を受ける事を願ひしに、痛くも拒み玉はずして、教るにかの居敬を以せり。其言に曰、「今時の学者、格物致知を最初の地とせざるはなし。居敬窮理、偏廢すべからざる事を知ぬ人もなし。されども大方窮理に能力を用て、居敬には疎し。是学者の通病也。居敬に疎くて窮理を務るは、油なき燈をかゝぐるが如し。いかに務むとも、知は明かならん本なければ也。本とは如何に。周子は曰、「静虚なる時は明かなり」。程子は曰、「定る時は明なり」。朱子『直ちに理を窮るは、虚心静慮を以て本とす』と説玉へる、是也。是皆居敬の事。今此本とする処なくて、膠々稜々の中に於て只管に理を究めんとするほどに、其得る所、真の明睿にはあらず、只姦知のみ増して、邪思妄念は旧に依て盛也。是身を以て知所なく、人皆然んと思ふにもあらず。其質美にて初より居敬窮理能兼進む人は論ずべきなし。然る事あたはずんば、只居敬に重くして可ならんか。能敬して心存せば、事々理に当る事を不得とも、過ちは寡かるべし。況や窮理も本を斯に得なば、終に進みゆくべきを以、孟子の求放心の章の朱子の註にも、『如是は則志気清明、義理昭著、而可以上達』と云へり。是も亦併せ案ずべし」と。誠に殊勝にありがたく覺て、吾日頃疑ひし事も、早く明めたる様に侍りて、さて退て思ふに、年頃

聞きし格物説は、大に程朱の意に非ずして、孔孟教誨の旨とは遙にへだたりぬ。凡諸子の道に悖り、其行俗人より劣たるも、皆此道の誤りより起りて、門に入りて已に違ふ、豈誠意正心の学ならんや。

故に年頃聞きし所を挙て其誤を正し、今得る所を述て此説を著し、別に或人の問を設て、予め人の疑ふべき事を弁じ、合せ名付て『格物弁議或問』と云り。

これによれば、三輪執斎は自ら西山の懶斎のもとを訪れ、教示を求めたという。そして懶斎はいまの学者が居敬窮理のうち窮理にばかり力を用いて、居敬を軽んじていることを歎いている。また該書には懶斎の序も寄せられている。

### 【懶斎と執斎】

三輪執斎と晩年の藤井懶斎とに交流があったことは、江戸時代の孝子伝を考える上で一つの示唆を与えてくれる。元禄十一年（一六九八）

【『今市物語』】の項にも述べた通り、藤井懶斎は天和と元禄にかけて、孝子伝を一手に引き受けた感がある。その没後、宝永と享保期にかけて孝子伝の執筆に力を注いだ一人が三輪執斎だった。たとえば『十二孝子』序（『執斎先生雑著』巻之一所収）には、

藤井翁のしるせる本朝孝子伝よりとり出し、其詞をつぐめ、菅相公をくはへ、屏風一双に絵と詞書とを押べしとて書つきたる也。詞書は押小路亜相公御なをしありて、中院前内府通茂公にもみせ奉りぬとある。こうした孝子重視根底にあるのが懶斎から受け継いだ「居敬」の重視であったことは間違いないだろう。

そして執斎の「孝」重視は享保期の懷徳堂へと受け継がれて行く。懷徳堂が中井覺庵『五孝子伝』（元文四年（一七三九）成）、中井竹山『子華行状』（明和二年（一七六五）刊）、『かはしまものがたり』（明和八年

（一七七一）など、孝子伝の執筆に積極的であったことはよく知られている。この懷徳堂の創建に関わった一人が、三輪執斎であったことも既に知られている。

つまり懶斎の孝子伝へのこだわりは、三輪執斎を通じて大坂の懷徳堂へともたらされたのである。

### ◆貞享二年十月【懶斎著作と署名】の項の末尾に左の記事を加える。

また右に見た通り、懶斎は「膝臧」などと姓を一字に縮めて署名することが多い。この慣習は近世中期に柳里恭（柳沢淇園）、物茂卿（荻生徂徠）などと好んで行われたものだが、その先駆者に懶斎を位置づける説が存する。内藤子興による儒学時評書とも言うべき著『俵ふるひ』（安政三年（一八五六）自序、写本）が幸田成友によって紹介・翻刻されている（『三田学会雑誌』四十一巻一・二合併号（昭和二十三年二月）初出。『幸田成友著作集』第二巻（昭和四十七年一月 中央公論社）所収）。その中に次のような言及が見える。

藤井懶斎ガ苗字ノ井ヲ省キテ藤ノ草冠ヲ除テ、勝懶斎ト名ノリシヨリ、漢風病ノ逆上仲間ニ伝染シテヨキコトシ、夫ヨリ苗字ノ本体ヲ失ハセタル無分別モノ、是等ノ輩迄一々批判ヲ加ヘンモ、紙筆ノ費ナレハ略之。

### ◆元禄三年【居所（三）千本】に次の記事を加える。

また早稲田大学所蔵藤井懶斎書翰（井狩善五郎宛）に次のような書翰がある。



当地火災之儀、御聞及候

付、為御見舞稻若水丈

方迄委細願御伝書、殊ニ

見事之鯉節二筒被

贈下、御芳志之至忝存候。

真邊敬節居所、幸ニ

火災相遁、大慶仕事ニ候。

猶御上京之時分懸御目、

委曲可申謝候。恐惶

謹言

藤井懶齋(花押)

三月廿六日

井狩善五郎様

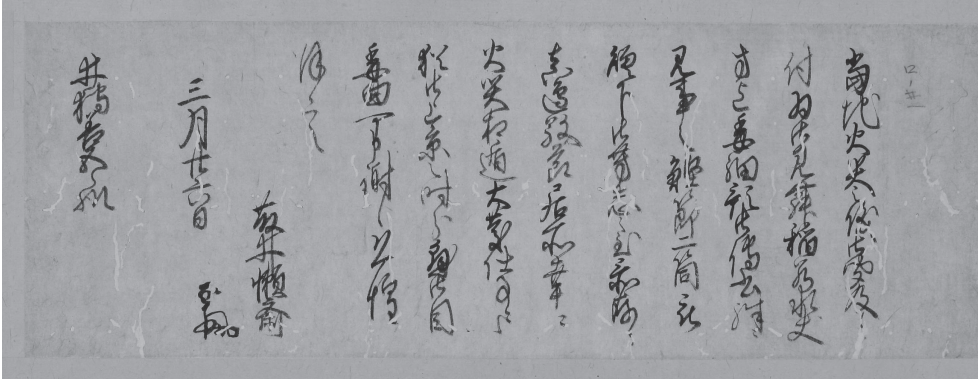
これによれば、この近所が火事に遭ったが、被災は免れたらしい。

井狩善五郎については詳しく知らないが、稲若水(元禄三年(一六

九〇)五月の項参照)に安否を尋ねているところから加賀藩の人物

であろうと推測しておく。

(完)



\*この論文は、科学研究費補助金(若手研究(B))『本朝孝子伝』研究―「孝」から見た近世前期文学の再検討」課題番号二〇七二〇〇〇六三 研究代表者・勝又基の助成を受けたものである。